
星の町

えもと

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の町

【Nコード】

N2599F

【作者名】

えもと

【あらすじ】

仕事を辞め、暇を持て余した響子。思い付きで、生まれ故郷を訪れる事にした。全く記憶に残っていない、この「ど」の付く田舎町で出会った、ちょっと変わったな兄弟。彼らと過ごした、二日間の物語。

故郷にて 1（前書き）

「あらすじ」固く書きましたが、ギャグ要素も多く入れたつもりです。

力を入れず、軽い気持ちで読んで下さい。

故郷にて 1

「うー、さむっ」

電車を降りて、私が開口一番に言った台詞はこれだった。
とりあえず、ホームに立っていても寒いだけなので歩き出す。

とある田舎の駅。

駅ビルもなければ、構内にコンビニすらも無い。
かろうじてあった自動改札を出ると、目に飛び込むのは「田舎」を
絵に描いたような光景だった。

左手には商店街、正面には申し訳程度に立っているバス停の看板。
およそメイン通りとは言い難い道からは、細い路地があちこちに延
びている。

後は住宅と、商店街から外れた店がぼつりぼつりとある程度だった。
高いビルも、ショッピングセンターも、大型スーパーも無い。

私は、その光景に立ち尽くした。

この分じゃ、ホテルなんて無いかも知れない。

しかし、今日の寝床だけは何としても確保したい。

野宿なんて冗談じゃないし、この寒さで一晩外に居たら凍死する。
それこそ冗談じゃない。

そう思いながら、人が行き交っている方 商店街の方に足を運
んだ。

何で女ひとりで、こんな田舎を宛ても無くさ迷っているかと言つと、

「逃走した」

と言つのが、しっくり来るかもしれない。

話は、一ヶ月ほど前に遡る。

故郷にて 2（前書き）

ありがたくも、一話を読んでくださった方、更新が遅くなってしま
って申し訳ありませんでした。

もちろん、書ききりますので、最後までお付き合い頂けましたら幸
いです。

故郷にて 2

都内の、某オフィス。

封書を片手に、私は廊下をズカズカと勢い良く歩いていた。

「課長！」

自席でのん気にお茶をすすっている課長のデスクに、バンツと手を突いて封書突きつけた。

「受理してください！」

私の勢いに押されたのか、据わった目を見て怖かったのか、課長は固まっている。

「え？これは・・・」

戸惑いつつも封書を受け取り、表に書かれた文字を見て、目を白黒させている。

「見ての通り、退職願いです」

「ちょ、ちょっと待ってよ。近藤君。どうして急に・・・理由は？」

このおっさん、もとい、課長は寝ぼけた事を聞いてきた。

「中に書いてあります。読んでください」

私はそれだけ言い放つ。

この会社に勤めて3年。

仕事に慣れてからは、あれこれ任されるようになった。

それ自体は良い事だ。

信用もされているのだろうから。

しかし、毎日の残業。

週6日勤務。

休みの日は疲れ果てて出掛ける気力もなく、死んだように過ごした。おかげで友達とも遊びに行く事も無く、彼氏には「そんなに仕事が大事なら別れよう」と宣告された。

これは普通、女が言う台詞じゃないだろうか。

さすがに、上司に「誰か人を付けるか負担を減らして欲しい」と何度も掛け合ったが、全て徒労に終わった。

そして、臨界点を突破した私は退職を決意したのだ。

「いや、でも・・・」

「デモもストも無いです！引継ぎのためにあと一ヶ月は働きます。それ以上は無理です。会社に拒否する権利はありません！」

「ごちゃごちゃ言おうとする課長の言葉を遮り、その場から立ち去った。」

故郷にて 3

見事に退職を果たした私は、すぐに仕事を探す気にもなれず、しばらくの間、これと言って何もせずに過ごした。

が、さすがに飽きてきた。

何もしないというのが、こんなに苦痛だとは思わなかった。

さて、どうしようか考えて、旅行にでも行こうと思い立った。温泉に行くも良し、「そうだ京都に行こう」なんてCMを思い出し、観光も良いかな、等とあれこれ思いを巡らせた。

そんな時、ふと生まれ故郷に行ってみようかと思いついた。

「生まれ故郷」なんて言っても、生後一年しかいなかった私には、その記憶なんて全く無い。

親戚や友人が居るわけでも、懐かしい思い出があるわけでもないが、ちよつと行ってみたいなとは思っていたのだ。この機に行くのも悪くない。

そう思い立って、ほとんど勢い任せに、ボストンバックに荷物をつけて、ワンルームの狭い部屋を飛び出した。

そして、今この状況下にいる。

飛行機のチケットがその場であっさり取れたから、泊まる場所も何

とかなるだろうと高をくくっていたのだが・・・
どうやら甘かったらしい。

都内ですつと過ごしてきた私は、ホテルなんてそこら辺にある物だ
と思い込んでしまっていた。

最悪は「漫画喫茶かファミレスで一夜を過ごして、ちゃんとしたホテルは次の日も良いか」
などと考えていたのだが、ファミレスどころか、24時間営業のコンビニすら無い。

「7時から11時まで営業」

という文字を、さっき改札外のコンビニでちらりと見かけた。

・・・初期のセブイレブンじゃないか。

「はあ」

思わず、ため息がこぼれる。

故郷にて 4

とりあえず、地元の人にも泊まれそうな所を聞くしかない。

そう思つて、商店街に来た。

日曜日の夕方とあつて、それなりに人が多く行き交っていた。

「すみません」

と、優しくすなおばさんに声をかけた。

「はい、何でしょう？」

「あの、この辺りで泊まれる所ありませんか？」

私の質問に、おばさんは「うーん」と考えてから、

「この近くには無いわねえ。もう少し奥地に行くと温泉地だから有るでしょうけど」

おばさんは無情にも「無い」宣言をした。

「泊るところが無いの？もしかしたら、私が知らないだけで、どこか有るかも知れないから、一緒に探しましょうか？」

と、親切にも申し出てくれたが、遠慮しておいた。

通りすがりなのに、そんな迷惑はかけられない気がしたからだ。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございました」

そう、お礼を言っておばさんと別れてから、さて、どうしようかと考えた。

この町を散策してみたかったのだが、寝床が無いのなら他に行くしかない。

女ひとりで外で過ごす度胸など無いし、先にも言ったが、この寒さで野宿なんかしたら凍死するのは間違いない。

とすると、もう少し探してみるか、温泉地とやらまで行くか……。どうせなら温泉にでも浸かって、散策は明日また出直せばいいか。

そう決めて駅に向かって歩き出そうとした時、

「泊るところ、探してるの？」

唐突に声をかけられた。

見ると、年の頃は10歳前後の小学生らしき男の子が、私を見上げていた。

「うん、そうなんだ。どこか知らない・・・よね」

少しかがんで、男の子目線を合わせて聞いてみる。

まあ、「知らない」と言われるのは目に見えているのだが。

「おれ、知ってるよ。泊まれるところ」

男の子は予想外の事を言った。

「本当に？」

私の言葉に、こくりと頷き、

「ついてきて」

男の子は、そう言いながら歩き出した。

おばさんは知らなかったのに、こんな子供が知っているのだろうか？
少し疑問に思ったが、まさか嘘を吐いているとも思えず、とりあえずは後に付いて行く事にした。

喫茶店にて 1

行き着いた先は、さっきの商店街から歩く事およそ5分。

ログハウス風の外観。

入口の周りには花やグリーンが飾られている。

この田舎町には似合わないようなオシャレな建物だったが、町並みから浮く事は無く、不思議と馴染んで見えた。

おそらく、木の優しい感じがそうさせているのだろう。

しかし、大きな問題がひとつ。

風に揺れる看板には「珈琲」と書かれていた。

そう、ここはどう見ても喫茶店だった。

「ここ？」

一応、聞いてみると、

「うん。ここだよ」

あっさりした返事が返ってきた。

・・・違う。

「ここは喫茶店であって、寝泊りする場所じゃない！コーヒーを飲んでくつろぐ場所だっ！」

と、大人相手ならツツコミを入れる事も出来るが、相手は子供だ。

親切心でしてくれたのに、抗議なんて出来ようはずも無い。

まあ、大きな勘違いをしているのだが。

立ち尽くす私を他所に、ここに来るまでに「北斗」と名乗った男の子は、扉を開けて中に入って行く。

チリンチリン とベルが鳴った。

仕方なく後にとくと、店内も外観同様シャレていた。

蛍光灯の白い光ではなく、オレンジっぽい優しい色の照明。

全て木で作られた、イスとテーブル。

ディスプレイに、アンティークらしき物が飾られていたが、それらは存在を主張しすぎず、店内に納まっていた。

壁に飾られた絵だけが鮮やかな色をしていたが、この空間と上手く溶け合って、店内を明るく見せる役割をしていた。

喫茶店にて 2（前書き）

今回から、一話に載せる文章の量を増やしました。
読みにくければ、ご指摘ください。

喫茶店にて 2

「おかえり、北斗」

店の奥から、男の人の声がした。

「ただいま。拾ってきちゃったんだけど、今日うちに置いてもいい？」

と、北斗が聞く声がある。

「またかい？」

話しながら、二人して店の奥から出て来た。

そして、声の主と目が合った。

おそらく、私と同じか少し上。20代半ば位の男の人だった。

しばし、沈黙が落ちる。

「北斗、人はね、拾ってきたって言うんじゃないよ。連れてきたって言うんだよ。前にも言っただろう？」

と、彼は北斗君に言った。

論点が明らかにずれている。

全力で突っ込みたかったが、何とか堪えた。

「すみません。北斗がご迷惑をかけたみたいで・・・あ、どうぞ、座って下さい。今、コーヒ―淹れますね」

そう言つて、カウンターの奥に消えてしまった。

どうする事も、何かをいう事も出来ず、とりあえず言われたままにイスに座った。

北斗君は、あたしの正面に座りながら奥の男の人に話しかける。

「泊るところ無いって言うから、拾つて・・・連れてきたんだけど。英兄、家に置いてても良いでしょ？」

「それは、構わないけど・・・」

言いながら「英兄」と呼ばれた彼は、コーヒーを持って出てくる。

「そこは構わなくてしょ！？」
そう言いたい。

彼は、私の前にコーヒーを置いて「どうぞ」と進めてくれた。

「どうも」

そう言つて受け取つてから、私は話し始めた。

「あのですね。なんだか凄い話になってますけど、これは北斗君の勘違いと言いますか、あたしの勘違いと言いますか」

「勘違いじゃないよ。泊まる場所無いって言ったじゃん」

私の説明を、途中でぶつちぎつて北斗君が抗議の声をあげた。
そんな私達を見ながら、彼は笑顔のまま、

「あ、コーヒー冷めない内にどうぞ」

と言った。

完全にペースを崩されている。

しかし、そう言われて飲まない訳にもいかず、砂糖をひとかけら入れて、コーヒーに口をつけた。

「おいしい・・・」

自然と、そう呟いていた。

結構コーヒーは飲むほうだが、心からおいしいと思ったのは初めてかも知れない。

「英兄のコーヒーは世界一なんだよ」

そう言いながら、北斗君は砂糖もミルクも入れないで、そのまま飲んだ。

「ブラックで飲むの？」

驚いて声をあげた私に、

「北斗はもっと小さい時からコーヒー飲んですから、慣れているんでしょうね。なかなか味にうるさいんですよ」

彼は苦笑しつつそう説明して「それで、さっきの続きですが」と話し始めた。

「もし、言い難い事情があるなら、無理に言わなくても良いですよ？
？今晚は泊まって頂いても構いませんし」

にっこりと笑いながら、そう言った。

喫茶店にて 3

私は慌てて事情を話す。

「いえ、そういう訳には……。実は、泊まるを探している時に、北斗君に「泊まれる所を知ってる」って言われて付いて来ただけなんです。てつきり、宿にでも連れて行ってくれるのかと思っていたんですけど」

「そうだったんですか。この街には宿はないですよ。観光地でもないですしね」

彼の言葉に、あのおばさんの言った事は正しかったんだと確信した。やっぱり、温泉地に行くしかないか。そう思い、コーヒーを飲み干した。

「ごちそうさまでした。あの、おいくらですか？」

そう言って私は立ち上がる。

とつとと宿探しを再開しなければ。

遅くなつて、宿が取れませんでしたじゃお話にならない。

「北斗が連れてきた、我が家のお客さんなのでお代は要りませんよ。それより、どちらに行くんですか？」

「温泉地があるって聞いたので、そこに行こうかと」

私の言葉に、彼は申し訳無さそうに、

「恐らく、途中までしか行けないですよ。今からじゃ乗り継ぎが無くなっていると思います。なにしろ、ここから4時間はかかる様な奥地ですから・・・」

私は、彼のその言葉に絶句した。

今から行ったとして、順当に行ければ到着は10時のはずだ。

そんな時間ですら、電車が無くなるとは・・・。

いくら田舎とはいえ、それは無いだろうと思いたかったが、残念ながら、彼の表情を見る限り冗談ではなさそうだ。

どうやって今日を乗り切れば良いのか・・・。

「どうして下調べくらいしてから、家を出なかったんだ」と自分を呪ったが後の祭りだった。

立ち上がった格好のまま固まっている私を見て、

「使っていない部屋が一つあるので、良かったら泊まって行つて下さい。家は僕と北斗しか居ないから気を使わなくて良いと思いますし。なにより、この寒さの中で外で過ごしたら、たぶん凍死しちゃいますよ」

彼はそう言った。

「だから、泊まれるところ知ってるって言つたじゃん？」

北斗君も便乗してそんな事を言う。

おかしい。

このふたり。

いや、「英兄」と呼ばれた彼はおかしい。

普通、行きずりの正体不明の人間なんか泊めないだろう。

しかし、しばし逡巡した後に、腹をくくってお世話になることにした。

彼らの感覚に巻き込まれて、自分の感覚も変になっている様らしい。だって、見ず知らずの人の家に泊まるなんて、普通だったら考えられない。

でも、この際それは気にしない事にした。

それは「凍死だけは避けたい」そんな理由からだった。

「あの、じゃあ一晩だけお世話になっても良いですか？」

一応、聞いてみる。

「ええ、何もありませんが、ゆっくりして行って下さい。えっと、あ、自己紹介して無かったですね。僕は、藤堂英理です」

彼は立ち上がって、右手を差し出しながらそう名乗った。

「私は、近藤響子です」

私も名乗って、彼の手を握り返す。

「どついう字を書くんですか？」

と、彼が聞いてきた。

「響くに子供です。藤堂さんは？」

「いい名前ですね。あ、僕の事は英理でいいですよ。英語に理科って書きます」

「じゃあ、あたしも下の名前で呼んで下さい。英語に理科ってなんだが、思いつきり理系が出来ますって言う感じの名前ですね」

「よく言われます。名前は理系なのに文系科目を専攻してたから、からかわれましたよ」

苦笑交じりにそんな事を言った所で、

「ほくとは、北斗星の北斗！」

と言いながら、握手したあたし達の手の上に、バシッと手を載せた。三人で「よろしく」と言いながら、変な握手をした。

こうして、すっかり彼らのペースに巻き込まれ、今晚ここでお世話になる事になった。

ホーム 1

ほぼ日が落ちてしまった夕方の商店街を北斗君と並んで歩いていた。と言うのも、北斗君がおつかいを忘れて手ぶらで帰って来た為だった。

私と会った時、彼は夕飯の買い物途中だったらしい。が、私を連れてそのまま家に帰ってきてしまったのだ。それで、買い物をするべく二人こうして商店街に戻って来たという訳だ。

「何が食べたい？」

そう聞く私に、

「カレー！」

と北斗君は元気良く答えた。

うむ。

冷蔵庫に何かがあるかチェックさせてもらってから来れば良かったなと思っただが、もう遅い。

全部材料買い集めて帰るしかないか。

そう思って、八百屋と肉屋、小さいスーパーらしき所に寄ったのだが、北斗君はここらでは有名なのか、行く先々で声をかけられた。

「今日はたくさん買っね。じゃ、タマネギはサービスしちゃうよ」

「あら、今日もお使い？えらいわねえ」

「お、キレイなおねえさんなんか連れて、どうした？」

などなど。

すれ違う人とも、何人かと軽く挨拶をしていた。

しかし、しばらくして、北斗君が特別という訳ではないという事がわかった。

良く見れば、あちこちで同じような姿が見られる。

田舎独特の「町民みんな知り合い」という感じだろうか。都会では信じられない光景だ。

近所の人ですら、ろくに挨拶なんてしない人もいるし、同じマンションにどんな人が住んでいるかなんて、全員は把握していない。たった、9部屋しかない小さなアパートなのに。

そのギャップに少々面食らいつつ、買い物を終えた私達は、あの喫茶店に戻ってきた。

「ただいま」

と帰ってきた私達を、

「お帰り」

そう言つて、英理さんは笑顔で迎えてくれた。

英理さんは、私達の荷物を見て、

「今日のメニューは何にしたんですか？」

そう聞いてきた。

「カレーです。北斗君が食べたいって言うから。あ、キッチンかりますね」

言いながら、私はカウンターの奥に入った。

そこには、たくさんのコーヒード豆とそれを落とす器具、フライパンや鍋なんかもあった。

料理が出来る環境はバッチリ整っている。

感心してキッチンを眺めていると、英理さんが追いかけて来て、

「あの、僕がやりますから」

少し慌てたように言った。

「泊めてもらうんだから、このくらいはやりますよ。作るの結構好きなんで、それなりに出来るつもりなんですけど」

笑顔で答える私の言葉に、

「でも・・・」

と何か言いかけたが、

「一応、味の保障はしますよ。友人にも好評だったんで、大丈夫だと思います」

笑顔全開で言う私に折れて、

「じゃあ、お願いしますね」

と引き下がった。

「笑顔全開」攻撃は、時に、有無を言わせない絶対的な効果があるのだ。

さすがに、いきなり泊めてもらうのだから、何もしない訳にはいかない。

お金払って泊まるホテルじゃないんだから、出来る限りの事はしないと申し訳が立たない。

一宿一飯の恩を、仇で返すわけには行かないのだ。
と、私は心の中で拳を握った。

キッチンから追い出された彼は、店内で本を読み始めた。

そんな姿を横目で見つ、袋から材料を出していると、今度は北斗君がキッチンに入ってきた。

「どうしたの？おなか減った？さすがに、まだ出来ないよ」

そう声をかけた私に、

「そうじゃなくて、おれも手伝う」

と、言いだした。

この年頃の男の子にしては、ずいぶんと感心した事を言う。

ホーム 2

「えらいなあ。それじゃ、手伝ってもらっちゃおうかな。これ、皮むいてくれる？」

そう言つて、じゃがいも洗い、それと一緒にピーラーを渡した。包丁を持たせるのは危ないが、これなら手を切る心配もないだろう。

北斗君は「うん」と大きく頷いて、せっせと皮むきを始めた。

その横で、私は支度をしていく。

「響子ねえちゃんは、どこから来たの？」

今度は、渡した人参の皮むきをしながら、そんな事を聞いてきた。

「東京だよ」

「行つた事ないや。どんなところ？」

「うーん。高いビルとかあつて、人も沢山いて・・・何でもある便利な所かなあ。でも、何か欠けてるのかもね」

私はそう答えた。

何か、大事なモノが欠けてしまっている。さつき買ひ物をしながらそう感じた。

それは、人と人との交流とでも言うのか。

雑踏の中ですれ違う人誰もが、お互いに無関心で。

誰かが道で寝ていても、座り込んでいても、泣いていても、見て見ない振りで。

この町では、きっとそんな事は無いんだろう。

私の言葉に、北斗君はわからないといった風な顔をした。

「どついう意味？」

「この町はステキだねって意味。来て良かった」

「響子ねえちゃんは、何でここに來たの？」

北斗君が、そう聞いた時、「北斗」と彼を優しく咎める声がした。

「う、ごめんなさい」

英理さんに叱られて、北斗君は小さく謝る。

おそらく、英理さんは氣を使ってくれたんだろう。

そして、英理さんの言わんとした事が、北斗君にも解ったらしい。まだ、ほんの子供なのに。

確かに、「ワケあり」と思うのが普通だろう。

里帰りでもない。

友人に会いに來たわけでもない。

泊まる所も無く、女一人で、田舎町をさまよっていたら・・・怪しい。

今更ながら、変な誤解をされているんじゃないだろうかと不安にな

った。

これは、解いておかなければ。

「別に、言いたくない」のつぴきならない事情』がある訳じゃないから、構いませんよ」

と、カウンターの外に声をかけてから、隣にいる北斗君に話しはじめた。

「この町はね、私の生まれた所なんだって。って言っても、一歳までしか居なかったから覚えてないんだけどね。原点に戻ってみようかなって思ってた来てみたって訳。自分探しの旅って感じかな」

そして最後に「思いつきなんだけどね」と付け加えた。

私の言葉を聞いて、北斗君は「うーん」と考えていた。

その姿をみて、少し笑ってしまった。

「何でわらうの？」

と、不思議そうに聞いてくる。

「かわいいなあと思って」

「おれ、もう子供じゃないもん。かわいいって言うな」

頬を膨らませて不満そうな顔を見せ、そう抗議した。

「子供じゃないって言うてる内は、子供なんだよ」

と思ったが、言うと言々機嫌を損ねそうなので、これは言わないで

おいた。

「あはは、ごめんね。そうだなあ・・・」

どう言えば解りやすいか考えてから、続きを口にした。

「毎日、毎日、お仕事ばかりで疲れちゃったの。だからね、辞めて逃げてきちゃったのね」

北斗君は私の説明を真剣に聞いている。

私は手を動かしながら、話を続けた。

「で、これからどうしようかなって考えて、とりあえず、旅行でもして気分転換しようかなって思ったの。それで、覚えてないけど自分が生まれた場所に行ってみようかなって思い付いて、ここに来たって感じかな。何となくわかった？」

真っ直ぐに私を見て、北斗君はこくりと頷いた。

「なんとなくだけど、わかった」

そう言った彼の顔を見て、本当に何となくながらも理解してくれたのだろう。

そう感じた。

子供に説明するには、難しい話だったと思ったが、なかなかどうして賢い子だ。

「響子ねえちゃんも、いろいろ大変なんだね」

北斗君は、そう言った。

「も」と言った、北斗君の言葉が気になったが、そこは聞かない事に決めた。

そして、ここは話題を変える事にした。

これから食事だというのに、暗い雰囲気では良くない。

これでは、おいしい物も不味くなってしまう。

せっかく作つたのに！

そう思つて、

「ああーっ！！」

と大きな声をあげた。

「手が止まつてる！そろそろ人参も入れたいんだけどなあ・・・」

その言葉に、北斗君はハツとしたように、人参の皮むきを再開した。

その必死な様子を見て、私はちょっと笑った。

また「子ども扱いするな」と怒られてしまうから、気付かれないように。

結局、夕飯にありつけたのは、夜の8時を回った頃だった。

夜空 1

自分で言うのも何だが、カレーの出来は結構良かった。

その証拠に、北斗君は「おいしい」と言いながら平らげてみせた。

「そう、良かった。おかわりは？」

そう聞く私に、頷きながらカレー皿を差し出した。

これは、食べるってことか。

笑顔でお皿を受け取り、おかわりをよそう。

「はい。いっぱい食べて、おっきくなるのよ」

言いながらおかわりを渡すと、「うん」と大きく頷いてみせた。

再びカレーを食べ始めた北斗君の横で、

「響子さんは料理が上手なんですねえ。よくされるんですか？」

と、英理さんが聞いてきた。

そこまで感心したような声を出されると、いくらなんでもオーバーな気がする。

小学校の調理実習の方が、もっと高度な物を作っているはずだ。

私は苦笑しつつ、

「大袈裟ですよ。カレーなんて小学生でも作れますよ。でも、料理はしますね。一人暮らしな

もので、作らないと食べられませんからね」

そう答えた。

「そうだったんですか。でも、自分で作ってばかりいると、たまには人が作った物が食べたくありませんか？」

「なりますねえ。誰かの手料理が恋しくなりますよね」

「今日、久しぶりにキッチンに立たずにおいしい料理が食べられて、なんだか悪い気もするんですけど、嬉しくて。ありがとございませう」

彼はそう言って笑った。

「いえ、一宿一飯のお礼には届きませんが、喜んでもらえたのなら良かったです」

私も笑顔でそう返すと、

「こないだ、学校で『ちんじゃおろーすー』習ったから、今度はおれが作る」

北斗君は元気良く、そう宣言した。

「ほんと？それは楽しみだわ」

「キッチンは壊さないようにね」

私の言葉に続けて、本気か冗談か、英理さんは朗らかに言った。

その言葉に、北斗君はちょっとバツの悪そうな顔を見せる。
前科があるのか・・・。

「大丈夫。次は上手くやるよ」

どこから来たものか、北斗君は自信満々に言う。

そんな風に、和やかに時間は過ぎていった。

夜空 2

食事の後、

「宿題は？」と英理さんに聞かれ、渋々と北斗君は自室で宿題を片付けていた。

英理さんはカチャカチャと皿洗いをしている。

私かというと、その横でせつせと皿を拭いていた。

「ここつて、料理も提供してるんですか？」

この店は、喫茶店と言う割には調理器具がかなり充実している。

喫茶店、兼台所として使っている様なので普通かもしれないが。

二階には寝室がなく、店はリビングとダイニング代わりらしい。

「ええ、と言ってもちよつとしたお菓子とか、軽食くらいですけど」

彼はそう答えた。

「へー。英理さんが作ってるんですね？」

「そうですよ。何とかお客さんにも提供できる腕になりましたし」

彼は笑顔で答えて、最後に「まだまだですけどね」と謙遜の言葉を付け加えた。

「すごいなあ。お店の経営もやって、料理も作って。大変そう」

「両親を亡くしてから、知識も無く、そのまま店を継いだんですけ

ど、料理もコーヒーも好きなので、趣味がそのまま職になったという感じですね。それなりに苦労はありますが、好きでやってる事だから楽しいですし、僕には向いてると思うんですよ」

そう言つて、にっこりと笑った。

そんな彼を見て「しまった」と思ったが、もう遅い。

この家には、両親が居ないんだろうという事は予測がついていた。北斗君の歳を考えて、お兄さんと二人暮らしは、少しばかり不自然だからだ。

だから、その事には触れない様に気を付けていたのに……。自分の不用意な発言に後悔しつつ、無言になった私に、

「どうしました？」

と英理さんが聞いてくる。

「あ、嫌な事を、言わせちゃったと思つて、その……」

はつきり言うのも悪い気がして、口ごもる私に、彼は何が言いたいのか解った顔を見せて、

「もしかして、両親の事ですか？」

念のため、といった感じで聞いてくる。

「ええ。すみません、変な事を言わせてしまつて」

そう言つた私に、

「こちらこそ、気を使わせてしまって、すみません」

何故か彼も謝って、「でも」と続けた。

「全然、気にする事はないんですよ。あれは、もう五年も前の話で・
・・」

「わー。言わなくて良いです！」

何事が説明しようとする彼の言葉を、私は途中で遮った。

「聞きたいとか、言わせようと思ったんじゃない、言いたくない事言わせちゃったかなって思っただけで・・悪い事したなど。だから、言わなくて良いんです！」

自分でもおかしいくらい、必死になって、話を中断させた。

別に、身の上話に興味があるわけでも、聞きたいわけでもない。彼だって、話したいわけじゃないだろう。

もう過去の事だとして、話して良い気持ちになる話題じゃないのは確かだ。

だから、言わせたくないし、聞きたくない。

夜空 3

私の必死な姿に驚いたのか、英理さんは少しキョトンとした顔を見せた後に、

「そこまで言うなら、言わないでおきますね」

そう言った後に、「でもね」と付け加えて、

「両親が居ないのは残念ですけど、今、幸せなんです。だから、気を使ってくれたのは嬉しいけど、響子さんが悪い事を聞いたって思うことは無いんですよ」

微笑みながら、そう言った。

気を使ったつもりが、逆に気を使わせてしまっている。

やっぱり、悪い事したなと思う反面、何だか羨ましくもあった。ハッキリと「今、幸せだ」と言い切れる彼が。

「幸せ・・・かあ」

ぽつりと、半ば無意識に呟いていた。

私は、きっと恵まれている。

両親もいるし、友達もいる。生活に苦労しているわけでもない。そんな自分を不幸だとは決して思わないが、「幸せか」と問われたら、胸を張って「幸せだ」と言い切る自信が私には、無い。そんな事を考えていると、

「そうだ！」

唐突に、彼は声を上げた。

「へ？な、なんですか？」

大きな声にビックリして、裏返った声で聞くと、

「あ、それだけ拭いちゃってもらえますか？」

彼は質問には答えずに、そう言った。

話の飛び方が突然すぎて、もう一度、何事が聞き返すことも、突っ込みを入れる事も出来なかった。
やっぱり、どこか掴めない人だ。

そう思いつつも、彼の言葉に素直に従って、手に持っていた最後の一枚を拭き上げると、

「ちょっと、来てください」

英理さんは言いながら、二階へと続く階段を上がって行く。
一体何だろうと思いつつも、私は黙って付いて行った。

彼は階段を上り、廊下の突き当りに来た所で、天井に棒らしき物を突き立てて、グッと引くと、

バコンッ

派手な音を立てて天井の一部が開く。

と、そこからさらに上へ続く階段が現われた。

ここは、忍者屋敷か。

そう思いつつ、ポカンと見ている私を他所に、

「あ、足元に気をつけて下さいね」

彼はそう注意を促しつつ、現われた階段を上っていく。

とりあえず、後に続くという選択肢しかない私は、ソロソロと真つ暗な階段を上った。

夜空 4

上りきった先にあつたのは、小さめの屋根裏部屋らしき空間だった。真っ暗だった階段とは違って、部屋の中は不思議と明るく感じられた。

電気も点けていないのに、だ。

「上、見て下さい」

そう言われて顔を上げ、部屋が明るい原因を理解した。斜め上に取り付けられた大きな天窓から、月と星の光が差し込んでいたのだ。

「うわぁ・・・」

それを見て、私は思わず声をあげる。

満点の星空に、半月が大きく輝いて見えた。
私が住んでいる所から見えるものとは、全く違う夜空だ。

「星って、こんなに明るかったんですね。知らなかった・・・」

「田舎だから、街灯もあまりないですしね。だから明るく見えるんだと思いますよ」

「こんなに明るく輝く星なんて、初めて見ました」

私が窓の外を見ながら言うと、

「知っていますか？あの星の光が僕たちの目に届くのに、何億年という時間がかかる事。そんな時間をかけて、あの光はここまで来てるんですよ」

彼はそう言った。

「聞いた事はありません。100年だって長いのに、そんなの想像もつきませんね」

「気の遠くなるような時間ですよ。それに比べれば人が過ごす時間なんて、きつと瞬く間です」

「それこそ、あつという間ですね」

「ええ。宇宙の大きさに比べたら、僕はとても小さい存在なんだから感じました。昔、落ち込んでいた時に星を見ながら思ったんです」

彼はそこで一度、言葉を切って、

「短い時間しかないんだから、悩んで過ごすよりも楽しく生きて行くって。あの星の様に明るくいられるように」

私は黙って話を聞いた。

「もちろん思い悩む事もありますけど、そればかりじゃ、もったいないような気がして。出来るだけ好きな事をして、笑って過ごしてゆけたら幸せだって」

彼は、穏やかに笑いながらそう言った。

「好きな事・・・か」

呟きながら、私は考える。

私の好きな事、これからやりたい事とは何だろう。

日々、生活に追われるばかりで、そんな事を考える余裕なんて無かった。

すぐに浮かんで来ない自分に、少し悲しくなる。

「今すぐ見つけなくても、良いんじゃないですか？」

黙って考える私に、彼はそう言った。

「必死に考えてたの、バレました？」

「顔に書いてありますよ」

少し笑いながら、彼は続ける。

「今の響子さんは、そういう時なんだと思います」

「悩む時期って事ですか？人生は短いのに？」

「休憩とでも言った方が良いかもしれませんね。言ったじゃないですか、「悩む事もあるけど」って。悩まない人なんていないと思いませんか？でも、それだけじゃダメだと思うんです。悩んだら、進んでいかないと」

彼の言葉を聞きながら、私は、自分が戸惑っていた事に気が付いた。

突然、得た自由というものに。

自由な時間が無くて辛かったのに、いざ手にしてみると、どうして良いか解らなかった。

何かしたい事があるわけでもない。

先が何も見えない、何にも縛られていない事が不安で仕方が無かったのかもしれない。

我ながら、何とも矛盾していると思う。

「でも、それって、何でも出来るって事かな」

呟く私を見て、彼は何も言わずに微笑んだ。

私も、あの星の様に、明るく生きてゆけるのだろうか。

この先に、何かを見つける事が出来るのだろうか。

「幸せだ」と胸を張って、日々を過ごせる様になるだろうか。

先が見えない不安はある。

それでも今なら、何か見つかる様な気がした。

空を見上げながら、私は心が軽くなったのを感じていた。

星の町 1

階段を下りると、まだオープン前の店内には、良い香りが漂っていた。

「おはようございます。ゆっくり休めましたか？」

「響子ねえちゃん、おはよう」

笑顔でフライパンを振りながら、そう言った英理さんの後に、北斗君が続けた。

「おはようございます。おかげでゆっくり眠れたんですが・・・すみません、すっかり寝坊してしまっただけ」

私は二人の言葉に、力なくそう言った。

まさかの大寝坊・・・とんでもない大失態だ。

「ゆっくり眠れたなら良かったです。もしかしたら眠れないんじゃないかと思って・・・。ほら、枕が変わると眠れなくなるって良く言っじゃないですか」

「そんな事ないですよ。良い部屋だったんで気持ちよく眠れました。ありがとうございます」

英理さんの言葉に、そう返す。

幸か不幸か、私は枕が変わったからといって、眠れなくなる程デリケートには出来ていないらしい。

それに、部屋は落ち着いた感じで、使い心地はとても良かった。

「そう言ってもらえて良かったです。さて、朝ご飯にしましょうか」
彼は言いながら、テーブルにパンとスクランブルエッグを並べてゆく。

「響子ねえちゃん、ご飯食べたら町を案内してあげるよ」
席に着きながら、北斗君がそう言った。

「あれ？学校は？」

「休みだよ」

「今日って、月曜日じゃなかったっけ？」

冬休みにはだいぶ早い筈だけど・・・と考えていると、

「今日は祝日ですよ。ハッピーマンデーですね」

英理さんが説明してくれた。

「そっか、すっかり忘れてた。じゃあ、お願いしようかな」

町を散策したかったから、案内役がいるのはありがたい。

「とっておきの場所があるんだ。楽しみにしててよ」

私のお願いに、北斗君は得意げ言って見せた。

「とっておきの場所」とはどんな所か気になったが、敢えて聞かないでおいた。
行くまでのお楽しみというヤツだ。

そして、三人で「いただきます」と声を合わせて、朝食に手を伸ばした。

星の町 2

私は、えっちらおっちら坂を登っていた。

英理さんは店があるので、北斗君と二人で散策に出掛けて今に至る。

この町は、どうやら駅から少し外れると、坂ばかりの町らしい。
緩やかな長い坂道が、縦横無尽に伸びている。

他にあるものといえば、民家。

それ以外には、特にこれと言ったものは見当たらない。

ひたすら歩き始めて、約30分あまり。

一体どこに行くつもりなんだろうか。

「ちょ、北斗君、あとのくらい？どこまで行くの？」

私の上がった息が、白く空に溶けていった。

「もうちょっと、ほら、見えたよ」

言いながら指をさす方に見えたのは、古い建物だった。

さして大きくも無い長方形の二階建ての建物は、長い間、雨風にさらされていたせいだろう、ぼんやり汚れた白い色をしていた。
その周りには木々と広場がある。

遊具の無い公園と言った感じだろうか。

「ここは？」

「公民館だよ」

北斗君はそう答えて、さっさと歩き出す。

子供は元気だなと思いつつ、北斗君の後に続いて入り口をくぐると、

「おじちゃん、おはよう。今日は誰も使ってないよね？」

北斗君は、管理人と思いきおじさんと話しかけた。

「ああ、おはよう。この間は、運が悪かったね。普段は北斗ぐらいしか使わないのにね」

「ほんとだよ。でもその後、あの人から楽譜もらったから、ラッキーかも」

「そうかい。それは良かったね。おや、今日はお連れさんがいるんだ？」

そう言つて、おじさんは私の方を見た。

「どうも」

私は、おじさんにペコリと頭を下げて会釈をする。

「どうも、北斗の知り合いですか？」

「ええ、まあ。そんな所です」

私が曖昧に返事をする、

「泊まるとこ無いって言うから、昨日拾ったんだ」

北斗君はそう説明した。

いや、間違っではないないが、何かが足りない。

「またかい？」

おじさんは北斗君にそう聞いた。

「また？」とはどういう事だろう。

前にも誰か「拾って」来たんだろうか。

そういえば、英理さんは私を見ても、あまり驚いた様子は無かった。
あの家では、日常的に人を拾ってきているのだろうか？

そんな事であるもんなんだろうか。

いや、普通は無い・・・はずだ。

が、この兄弟ならやりかねない。

などど考えていると、

「まあね。それより、おじさん、鍵かしてよ」

北斗君が言う。

「ああ、はい」

「ありがと。かりてくね。響子ねえちゃん、こっち」

おじさんから鍵を受け取り、奥の部屋へと入っていく。

私も続いて入ると、そこには一台のグランドピアノがあった。

「ピアノ弾けるの？」

「ちょっとだけどね」

質問に答えつつ、ピアノの蓋をガタンと開ける。

「もしかして、とっておきの場所って、ここ？」

「そうだよ。ここの窓から、町が見えるんだよ。」

言われて窓の外を見てみると、全部とは言わないが、かなり広範囲の町が見渡せた。

覚えてもいないのに、どこか懐かしさを感じさせる田舎の町並みが。

「おれさ、ここでピアノ弾いてると、いやな事とか忘れちゃうんだ。響子姉ちゃんは何か弾ける？」

北斗君はそう言いながら、鍵盤をいくつか指で弾いた。

「うーん。『ねこふんじゃった』くらいは」

私がそう返すと、

「じゃあ、一緒に弾いてみようよ」

笑顔でそう言った。

「ええ？ちゃんと弾ける自信がないなあ」

「大丈夫だつて。やってみようよ」

言いながら椅子の半分を空けて、ぽんぽんとその場所をたたいた。
どうやら、座れてらしい。

まあ、自信は無いけど、やってみるか。

ピアノの長い椅子に、二人で並んで腰をかけた。

星の町 3

「せーの」

とタイミングを合わせて、同時に鍵盤をたたいた。

いつ以来だろうか。

ピアノなんて触るのは。

弾けるかどうか怪しかったが、意外とちゃんと弾けて驚いた。

『ちゃん、ちゃん』と最後のオチまでつけて、

「ちゃんと弾けるじゃん。上手だったよ」

北斗君はそう言ってくれた。

「ありがとう」

「どう？楽しかった？」

「うん。一緒に弾くのがって面白いんだね。すごく楽しかったよ。北斗君は？」

「おれも、楽しかった！」

笑顔で答える彼に、

「ありがとね」

私がもう一度、お礼を言つと、

「それは、さっき聞いたよ?」

小首をかしげて、そう言つた。

「さっきのは、褒めてくれてありがとう」

「じゃあ、今のは?」

「優しくしてくれて、ありがとう。元気付けようとしてくれたんだよね。違う?」

私の言葉に、ちょっと考えてから、

「昨日、疲れちゃったって言ってたから……。ここでピアノ弾けば元気になるかなあと思つて。元気になった?」

そう言つた北斗君を、私はぎゅっと抱きしめた。

「わっ! なになに?」

言いながら、私の腕の中でジタバタしている。

「いや、いい子だなあと思つて。あ、なんか弾いて欲しいな」

私が言つと、

「じゃ、じゃあ、離してよ」

ちよつと照れた様に、抗議の声をあげた。

手を離して立ち上がると、

「どんなのが良い？」

と聞いてきた。

「北斗君が、好きな曲が良いな」

私の言葉に、少し考えてから、

「じゃあ、おれの一番好きな曲、弾くよ？」

そう言つて、うなずくあたしを見てから、鍵盤に手を伸ばした。

曲は 「きらきら星」だ。

北斗君の指が、リズムを刻む。

それを聞きながら、窓の外の青い空を眺めた。

星の町 4

「お世話になりました、本当にありがとうございました」

私はボストンバックを担ぎながら、喫茶店の店先で頭を下げてそう言った。

「こちらこそ、カレーおいしかったです。ごちそうさまでした。気をつけて帰ってくださいね」

そう言ってくれたのは、英理さんだ。

「もう少し、いれば良いのに・・・」

北斗君は、残念そうに言った。

「ありがとね。でも、帰らなきゃ。また来ても良いかな？」

「うん。絶対だよ。今度はおれがご飯作るから」

「楽しみにしてるね」

「はい。指切りげんまん」

小指を絡ませて、北斗君と指切りをする。

そんな私達を見ながら、

「ぜひ、また来てください。冬も良いですけど、夏の星空も綺麗な

んですよ。町の名前が「美星町」ですからね。夜空を見上げるには最高の町ですよ」

英理さんが言った。

「確かに、そうですね。あの星空は、本当に綺麗でしたから……。また、お邪魔させてもらいます」

私は笑顔で言って、「それじゃ」と付け足し、駅の方へ足を向けた。

少し歩いてから、振り返ろうか迷って、やめた。

代わりに空を見上げると、太陽の白い光がまぶしく見えた。いい天気だ。

今夜もきつと、綺麗な星空が見られるだろう。

東京はどうだろうか。

少なからず、星は見えるかもしれない。

帰ったら、じっくり天体観測でもしてみようか。

そんな事を考えつつ、風景を眺めながら歩くと、あっという間に駅に着いた。

電車を待ちながら、両手をぐっと上に突き上げて、大きく伸びをした。

このまま、飛べそうな気がするな。

なんて馬鹿なことを思った時に、ホームに電車が滑り込んで来た。

星の町 4（後書き）

最後に、エピソード的なものを載せてお終いです。
あと一話、お付き合いいただければ幸いです。

手紙

北斗君、英理さんへ

お元気ですか？

ご無沙汰しています。

あれから半年以上も過ぎてしまっているんですね。
相変わらず、拾い物ならぬ、拾い人でもしているんでしょうか？

私はというと、実はイタリアにいます。
パティシエになるべく、留学中です。

驚いたかもしれませんがね。

私も正直、自分の事ながら驚いています。

半ば思いつきで留学を決めてしまいましたから。

でも、美星町に行ったのも思い付きでした。

それで、ステキな体験が出来たんだから、私のこの行動もなかなか
悔れないのかもしれない。

現に今、楽しい日々を過ごしています。

最初は、言葉も通じず、上手いかない事も多くて大変でしたけど
ね。

今度、一時帰国することになりました。

その時には、またお邪魔したいと思っています。

北斗君との約束を果たさない。

それに、夏の美星町に行ってみたいですしね。

あの時、二人に会わなければ、私は今頃何をしていたんだろうかと時々考えます。

今、こうして過ごしているのは、二人のおかげだと思っています。

本当に、ありがとう。

お礼に、イタリア仕込みのお菓子をごちそうします。

焼き菓子は、なかなか上手に作れるようになったんですよ。楽しみにしててもらえれば、嬉しいです。

それでは。

追伸

同封した写真は、イタリアの空です。

ここもとても綺麗だけど、やっぱり美星の空が懐かしく思います。

空は一つに繋がっているはずなのに、同じではないんですね。不思議です。

美星町から星空を見るのを、楽しみにしています。

手紙（後書き）

これでお終いです。お付き合いいただきまして、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2599f/>

星の町

2010年11月27日06時18分発行